様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２１年４月７日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2007～2009
課題番号：１９５２０７０５
研究課題名（和文）祭りの創造と参加に見る市民形成と地域活性化に関する人類学的研究

研究課題名（英文）Anthropological Study on the Civil Formation and Revitalization Seen in the Invention of Festival and Social Participation

研究代表者
伊藤　亜人（ITO ABITO）
早稲田大学・アジア研究機構・教授
研究者番号：50012464

研究成果の概要（和文）：

住民主導による新しい祝祭形式である「よさこい方式」の創出・導入がもたらす地域社会の変容として、市民意識の形成と地域活性化について具体的事例の観察記述に拠って検証した。特に、群舞形式の競演における周縁的住民の主体的参加と自由な個性表現、共通関心による組織作りと役割・連携、チーム内外の交流活動を通じて、祝祭が自主管理・自己責任に基づく新たな公共圏として浮上し、個人と地域社会の活性化を促していることを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：

Given the increasing popularity and successfulness of 'Yosakoi-Matsuri' as a new style of local festival in Japan, the present research examined its social impacts on the growth of civil consciousness among participant residents and the process of revitalization of local communities, based on the ethnographical approaches to the cases in Kochi, Sapporo, Nagoya, Sasebo and Tokyo for examples. Special focus is on the developed participation among informal sectors which has been marginalized in conventional local societies, especially as a self-expressive dancer or musician, active member in team-building, organizing staff or coordinator in local activities, and their transformed self-consciousness and self-reliant behavior is examined in relation with the revitalized common spheres.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００７年度	700,000	210,000	910,000
２００８年度	700,000	210,000	910,000
２００９年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	1,900,000	570,000	2,470,000

研究分野：文化人類学
科研費の分科・細目：人文科学・文化人類学
キーワード：祝祭、よさこい祭り、参加、周縁性、実践、市民社会、公共圏、地域活性化

１．研究開始当初の背景

神社や氏子組織を主体とする伝統的な都市祭礼の研究が、民俗学および人類学によって儀礼形式・祭祀組織等を中心に各地の事例に基づき研究蓄積が豊富であるのとは対照的に、行政や商業セクターが主導する新しい祭りについては、民俗学や地理学による記述に留まっていた。高知のよさこい祭りに代表される住民主導型の新しい都市の祝祭についても表層的な関心に留まり、これを現代の都市社会における世俗的儀礼として位置づけ、その社会的な脈絡を踏まえた研究は大変遅れていた。新しい文化伝統の創造過程としてばかりでなく、広範な住民の参加実態とその社会的背景、運営の在り方、その社会的波及効果等についてはほとんど関心が払われなかった。こうした祭り形式が、現代の市民社会とどのような関連性にあるのか、各地への波及と発展が地域社会のどのような現実を反映するのか、地方分権化や規制緩和、地域活性化との関連、女性や学生や子供の社会的プレゼンスとの関連など、浮上してきた新たな課題についていずれもほとんど未着手であった。伝統的な祭りにおける新住民と旧住民の間の葛藤については人類学者の関心を呼んできたが、新しい祭り導入の担い手である学生と女性の存在は、従来の都市研究において欠落していたといえる。こうした現代社会における複合的研究課題に対する方法論も、人類学における複雑社会（Complex Society）の研究方法はほとんど活かされてこなかった。

２．研究の目的

現代日本の都市社会研究の一環として、近年各地で地域社会活性化の有効な手法として脚光を浴びている地域祝祭として、従来の神社を中心とする際礼とは異なる新しい世俗的儀礼をとりあげ、その中でも、広範な住民の参加と主導によって活気を呈してる「住民参加型祭り形式」である「よさこい祭り」に注目し、その総体的・民族誌的研究を行う方式をとりあげ、高知におけるその創造から50余年間にわたる展開過程、その北海道への導入と全国各地への伝搬過程の実態調査を踏まえて、この方式に顕著な住民参加の様態、表現形式の自由化・多様化と競演の活性化様相、民主的な組織運営の実態、地域内および地域間の交流・連携、自主管理・自己責任原則の成立・浸透等の実態とその背景について、人類学の現地調査による民族誌的な記述を踏まえた事例研究を実施し、現代日本においてこの祭りがもたらす市民意識の形成・成熟と地域社会活性化の可能性を検証することを目的とする。

３．研究の方法

(1)楽曲と踊りの形式・象徴性の文化的側面と、参加者の個性、チーム選択、役割、連帯、規範、責任という社会的側面・過程とを総体的に捉える点で、人類学の基本的な研究展望と方法論として、具体的な事例の民族誌的な記述に基づく分析を用いた。祭りの創造については、従来の論点（Invention of Tradition）に留まらず、「伝統」による正統性にも拘泥しない可塑性・流動性に注目して、社会状況とともに「進化」し続ける様相に注目する方針に立った。

(2)より具体的方法としては、事例となる各地の「よさこい方式」の祭りにおける参与観察と、当事者に対する集約的なインタヴュー調査と現地における文書資料および映像資料を併用した。事例としては、高知市の「よさこい祭り」、札幌市と北海道の地区支部（上川支部の枝幸、東神楽）における「YOSAKOIソーラン祭り」、名古屋の「日本ど真ん中祭り」、岐阜県瑞浪市の「バサラ瑞浪祭り」、三重県津市の「安濃津よさこい祭り」、長崎県佐世保市の「させぼよさこい祭り」、神奈川県大井町の「大井町ひょうたん祭り」、東京の「東京夜さ来い祭り」、池袋の「東京よさこい」、原宿の「スーパーよさこい」およびその周辺地区（埼玉県朝霞、坂戸、千葉市など）のよさこい系祭りを対象とした。

(3)現代の複雑社会（Complex Society）における多様な行為者(actor)の主体的な関心と視点、各自の社会的属性を反映した行動・人脈を観察・記述する方法論として、非集団研究（Non-Group Study）・ネットワーク研究（Network Studies）を踏まえたアプローチを心がけた。また、そうした個性の利己的志向(Ego-centric Orientation)を念頭に置いて、その相互作用(interaction)と関連を踏まえて全体の統合・志向性・葛藤等を多角的に把握する戦略的なアプローチとして、行政や専門家まで含めた行為者を幅広く対象とする行為者志向型アプローチ(Actor-Oriented Approach)を心がけた。

(4)最新の開発研究および市民社会における研究姿勢として、研究者と研究対象との二項区分による限界を克服する方法論的展望と

して、現地の人びとの研究参加を促す試みである相互参与形研究（Participatory Research）を積極的に取り入れ、その一環として、研究展望や課題設定に関しても地元当事者の実感と視点を取り入れるため、現地における対談や懇談会などの機会を積極的に活用する方針をとった。

４．研究成果

(1)高知における「よさこい祭り」の現地調査によって、この新しい祭り方式の特質として、祭り全体の企画・運営における脱中心性と、その背景として主催者側の主導性の自己抑制ないし多元的調整機能の重視が結果として有効に働いたこと、それが参加者の量的・質的な拡大および参加基盤・参加形式の多様化と柔軟性、楽曲と踊り形式の自由化、積極的な音楽技法や身体技法や道具と機器の導入、方針やルールの絶え間ない改編を可能とし、住民の主体的参加と自己顕示を促して魅力的な競演へと発展をもたらしたことが明らかとなった。こうした流動的かつ柔軟な態勢は、従来の地域社会における祭りやイヴェントでは到底考えられないものであり、従来の研究が見逃してきた過程である。高知の事例は他に先駆けてこうした祝祭の運営を自然発展的ともいえる過程に拠って実現した点で画期的・先駆的なものと位置付けられる。公式の決定や規則を設けることなく緩やかなルールの自然成立を見た点、規制を緩和して公平な運営方式によって、伝統的な祭りに見られない柔軟で許容性に富んだ新しい祭りへ発展しながらも、同時に自己やトラブルを回避できた点など、市民社会の祝祭にをふさわしい要件を満たしてきた実態が明らかとなった。

(2)具体的な記述の対象として、祭りを構成する単位である踊り子チームと、競演場を運営する地区町内について、いくつかの例を取り上げて集約的な調査を行った。その結果、参加団体の多様性を反映して、各チームごとに特質がみられ、チームを創設し核を成している個性豊かな仲間の存在が記述分析の対象として浮上した。各チームの祭りに取り組む姿勢、参加目標、楽曲・踊りのセンスと方針、メンバー募集の方法、年齢などメンバー構成が、チームの運営、メンバーに対する奉仕精神など、いずれもチームカラーとパフォーマンスに特質をもたらす実態を観察記述しえた。チームの計画性、組織性、継続性と変革志向性、財政的方針なども多様であり、一方の極には、企業ぐるみ、地域単位で取り組むチームがあるが、他方にはその都度新しい方針と可能性を試み、創意・変革に積極的に取り組むチームもある。チームの核となる仲間には、会議も規則も役割も設けずに祭りの時期が近づくと唖云の呼吸で準備を始めるチームもある。

市内に設けられた競演会場もそれぞれの町内独自の方針で運営されており、同様に多くの町内では、中心的な人物を囲んで主要な世話役たちが、明確な役割・組織・会議・日程も設けずに唖云の呼吸で準備にとりかかり、地元の手の空いた人が手伝うことで、準備運営を全てこなしてしまう。こうした方式によって 50 余年間にわたって何の困難も無く運営し続けてきたことは、従来の都市際礼の研究からは全く想像もできない。地域社会そのものの解明が不可欠であることが明らかとなった。

よさこい祭り全体の運営においても基本的に同じ様相がみられ、主催者側(商工会議所他からなる振興会)には明確な企画性・主導性、役割や決定機関、規則などのマニュアルも明確なものはなかった。中心性・指導性の欠如した祭り運営が、結果的に参加者の主体性を促し、高知ならではの市民主導の祭りを生みだしたと結論づけられる。

(3)多様な参加者の多彩な社会的属性を把握することは容易ではないが、多様性の中でも特筆すべき点として、都市における周縁的住民の主体的参加を指摘できる。神社と氏子組織に基づく伝統的な都市祭礼では、町内が祭祀組織の中心となっており、その町内においても旧住民を中心とする階層的役割規定が、新住民や若者や女性の参加を阻んできた。これに対して「よさこい方式」の祭りでは、踊りはほぼすべての住民に参加可能であり、若者や女性には得意な領域である。しかも多様な楽曲・踊りの中から個人の感性に応じてチームを選ぶことが可能となっている。若者、女性、子供にとって踊りは魅力的な自己表現の機会であり、非日常的な解放感を満たす機会ともなっている。日常時には自己の存在を表出・発揮する機会に恵まれない、ややもすれば周縁的な位置に置かれてきた住民にとって、祭りは重要な社会参与の機会となっている。周縁的住民の参加は、女性・学生・子供のほか、専門学校生、小規模販売店の店員、居酒屋などの小飲食店、訪問販売員、看護や介護従事者、医趣味芸や武道仲間、宗教団体、障害者、外国人などに顕著であり、自己の存在主張の機会となっている。

「よさこい方式」の祭りの社会的効果として、こうした周縁的セクターの参加と主役化によって、祭りの活性化ばかりでなく、チームの一員としての実践的参加による市民的自覚の高揚、組織経験と市民連携を通して、新たな公共圏と呼ぶにふさわしい現代的な儀礼空間を創出したことは特筆に値する。

(4)この「よさこい方式」が札幌に導入され、短期間に広範な住民の参加を得て全北海道に広がり、規模のみならず運営面においても驚異的な発展を遂げた過程について検証した。さらに名古屋、佐世保、津、東京や関東圏における「よさこい方式」の導入・定着の過程についても、事例調査を実施した。北海道で学生が祭りの導入と企画運営面において主導的な役割を演じた実績が高く評価され、名古屋をはじめ各地で学生が住民参加の導入役を果たしたことも特筆される。こうした全国各地への波及は、市民社会における住民参加型の儀礼としての「よさこい方式」の先進性・普遍性を裏付け、また住民主導による地域社会活性化としても有効な市民運動の様相を呈するに至った過程が明らかとなった。

(5)「よさこい方式」における目覚ましい発展が高く評価される半面、祭りの規模拡大、地域への定着化、楽曲や踊りの技能向上や洗練化、コンテスト化、運営面の制度化と複雑化、安全管理上の規制強化などが進行した結果、住民参加や個性表現や祭りの運営において定型化や閉鎖性が再現するというディレンマが新たな課題として浮上していることも明らかとなった。祭りの持続性にも関わるこうした課題について、討論と新たな模索が祭り運営において重要な関心事となっており、その論点の整理と調整において、研究者に対しても市民の一員としての関与が求められる状況にある。基調講演や懇談会やワークショップの座長役を求められるに至ったのも、人類学の総体的な研究の成果といえよう。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）
〔雑誌論文〕（計１件）
伊藤亜人 2009 年「韓国における祝祭」『(東アジア研究所講座）東アジアの民衆文化と祝祭空間』93－125 頁（よさこい祭り研究に言及）査読無し

〔図書〕（計１件）
伊藤亜人 2007 年『文化人類学で読む日本の民俗社会』有斐閣（第 6 章「市民　よさこい祭り」157－182 頁)。

６．研究組織
(1)研究代表者
伊藤　亜人(ITO　ABITO)
(早稲田大学・アジア研究機構・教授)
研究者番号：50012464